

LEADERS NOW!



現実世界に 数学を

ハッカソンデビューから快進撃

●システム理工学部 4年次生
加藤 美咲さん

ソフトウェアやサービスを開発し、アイデアと技術を競い合うITコンテスト「ハッカソン」の舞台で、存在感を発揮する加藤さん。「現実世界に数学を落とし込みたい」との思いをアイデアに乗せ、快進撃を続けている。

加藤 美咲—かとう みさき
■1995年、大阪府堺市生まれ。システム理工学部数学科4年次生。大学3年次の12月にハッカソンに初めて挑戦し、その後1年間で11大会に出場し、数々の賞を受賞。特技はクラリネット、趣味はモノ作り。座右の銘は「好奇心に嘘をつかない」。

澄んだ陽光が差し込む梅田キャンパス「KANDAI Me RISE」の2階のテーブルに、戦利品がずらりと並ぶ。ハッカソンで数々の賞を受賞している加藤さんは、「大会の賞状や作品などはすべて記念にとっています。就職活動にも役立ちました」とにっこりと笑った。大阪港開港150周年記念イベント「フェリーハッカソン」で奨励賞を受賞した「コンパスバンド」を手に、「ハッカソンのお陰で今まで知らなかった世界と出会うことができ、思考の幅が一気に広がりました。この作品は100円ショップで購入したバンドのお弁当箱に電子コンパスを内蔵したもの。フェリーのデッキから見える景色を案内するデバイスなのですが、絶対に可愛いほしいほうが良いと思って」と少し照れくさそうに語った。

ハッカソン(hackathon)とは、「hack」と「marathon」を組み合わせた造語で、IT、ロボット分野などのエンジニアやデザイナー、そしてプランナーなどが集まり、与えられたテーマに対して短期間でアプリケーションや新しいサービスを開発するイベントのこと。大手企業や自治体が出資対象としたり、ベンチャーキャピタルの出資対象としたりするケースが多く、参加者も学生から社会人まで幅広い。加藤さんは電気通信工学研究会の仲間を誘われて、3年次の12月にハッカソン初参加となる「Hack U 2016」に挑んだ。カメラで英単語を認識し、自動で翻訳する機能に加え、単語テストも作成できる英単語学習のスマホアプリは、見事優秀賞を受賞。デビューからわずか1年間で11大会に出場し、9大会で数々の賞を獲得するなどプランナーとしての存在感を発揮した。

企画やアイデアを担当するプランナーとして出場する加藤さんは、「与えられたテーマに対して、独創的なアイデアをいかにしてカタチにするのか、それこそがハッカソンの醍醐味です。職種も立場も違う、見ず知らずの人とチームを組むので、たくさんの新たな発見や刺激が自分を成長させてくれます」とハッカソンへの思いを話す。そんな加藤さんの最も印象に残っている大会は、世界69カ国187都市で同時開催され、約25,000人が参加した大会の大阪予選である「NASA Space Apps Challenge 2017 Osaka」。加藤さん擁するチーム「Earth Ice Sight」は、深刻化する地球の海面上昇問題に対して、被害状況や海面侵略の様子を分かりやすくシミュレーションできるWebアプリ「Blue earth watching」を開発し、優秀賞に輝いた。

アイデアの源は「空想のイメージを立体図形で表すように、現実世界に数学を落とし込みたい」との思いから。プランナーとしてチームリーダーになることが多く、「それぞれの技術や能力を生かすためにも、皆が同じ方向を向けるように空気感を統一させることが一番大切だと思います」と言う。今春からIT企業に勤める加藤さんは、「自分のやりたいことができた4年間でした。特に梅田キャンパスはハッカソンの会場として思い入れのある場所であり、アイデアのヒントを模索している時には、キャンパスの職員

の皆さんが全力でバックアップしてくれました。本当にいろいろな経験を積むことが出来ましたし、関西大学に入学してハッカソンと出会い、人生が変わりました」と目を輝かせた。

◀ハッカソンでプレゼンを行う加藤さん



マイノリティーとの出会いが 今の自分を築いた

戸籍上は男性の敏腕女性弁護士

●北本法律事務所 弁護士
仲岡 しゅん さん —法科大学院 2010年修了—

大阪市北区西天満の大阪地方裁判所界隈に異彩を放つ女性がいる。ワンピース、ジーンズ、時には豹柄の衣装を身にまとい、依頼者のトラブルを解決する。男性として生まれた仲岡さんはトランスジェンダーの敏腕弁護士として、多方面で活躍している。



法律事務所が密集する路地に映える漆黒のワンピースとターコイズブルーのピンヒール。腰まで伸びた黒髪をなびかせながら歩く一人の長身女性に、すれ違う通行人の視線が自然と集まる。世間一般の弁護士のイメージとは対極のオーラを放つ仲岡さんは、「どこにでもいるお姉ちゃんみたいで安心しました」と依頼者さんからよく言われますよ。弁護士にはどうしても堅いイメージがつきまといますから。私は気さくでざっくばらんに接することができる関係性を大事にしています」と笑った。3年目ながら多方面で活躍する敏腕弁護士の仲岡さんは男性として生まれ育ったが、今は女性として生きている。

弁護士を志した理由はマイノリティーとの出会いから。幼少期からアトピー性皮膚炎を患い、言葉の暴力を受けることも少なくなかった。声変わりなどの性差を実感する度につきまとう違和感を抱き過ぎた多感な時期に、差別をテーマとした授業を受けた。「心ない言葉を掛けられる人々などを見て、差別の現実を語る姿にシンパシーを感じました」。大学進学後、人権問題研究サークルに所属し、色々なマイノリティーの人々と出会う中で、「私たちの力になってほしい」との声が多く、「それなら私になってやろう」と一念発起。確固たる目標を叶えるため、関西大学法科大学院に進学したが、そこで厚い壁に直面することに。「性への違和感を克服しようと、あえてひげを生やしてみましたが大変でしたね。司法試験も崖っぷちで、将来への希望が持てなくて本当にし



仲岡 しゅん—なかおか しゅん
■1985年、大阪府河内長野市生まれ。大阪府立生野高等学校卒。大阪市立大学法学部卒、10年関西大学法科大学院修了。学童保育指導員などを経て14年に司法試験に合格し、翌15年から女性弁護士として登録。雑誌「女性自身」でコラム「あなたのトラブルしばいたる!!」を連載。

んどかったです」。ひげを生やした当時の学生証を手に、当時のジレンマを振り返った。

2014年に司法試験に合格後、女性弁護士として登録した仲岡さんへの依頼は交際関係のトラブル、特に女性からの依頼が多い。「離婚をはじめ、性と愛にまつわる案件が多いですね。DV、ストーカー、セクハラなどです。弁護士仲間からは、『しゅんちゃんはやけに濃厚な案件が多いね』と言われますよ」と苦笑いする。印象に残っている仕事は、とある飲食店で法外な請求をされた男性からの依頼とのこと。裁判となると時間もお金もかかるので、「それなら直接お店に行って話をつけよう」と。依頼者と共に状況を整理して、被害金を取り戻したという。そんな正義感溢れる人柄に依頼者は信頼を寄せるのだろう。

本業に加え、より分かりやすく、かつ、大阪弁を織り交ぜながらオチで締めくくるコラムや講演活動など、各方面で活躍する仲岡さんは、「女性として生きることで重い鎧から解放されて、自分を正直に表現できるようになりました。昔は内気で人前に出るのが苦手でしたが、今では周囲からアクティブで気が強い印象を持たれています。マイノリティーもそうですが、依頼者に寄り添えることができる弁護士になっていきたいですね」と気さくに微笑んだ。